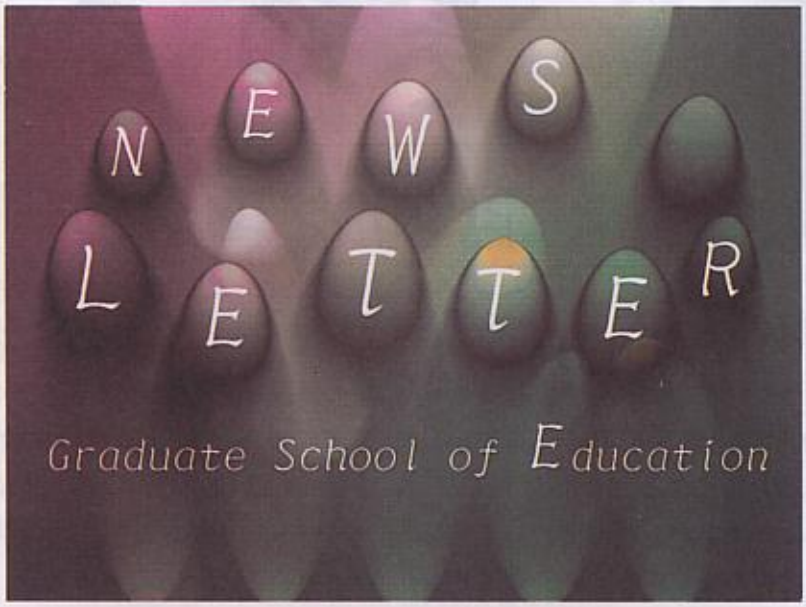
京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

NEWSLETTER

No.9　2004.12



（目次）

●巻頭言
目覚めて暫く　研究科長・学部長　藤原 勝紀　2

●研究ノート
教官から　教育学講座　教授　鈴木 晶子　3
院生から　比較教育政策学講座 博士後期課程３年　楠山　研　3
院生から　教育認知心理学講座 博士後期課程２年　安藤 花恵　4

●社会人院生から　教育科学専攻　専修コース修士課程１年　津田 昌宏　4

●事務室より
法人化以降の就職戦線　専門職員　藤岡 正雄　5

●図書室より
閲覧システム運用開始！　図書掛　福井 京子　5

●臨床教育実践研究センターから　臨床心理実践学講座　助教授　角野 善宏　6

●留学生から　教育科学専攻　教育史　修士課程２年　タカノ・ヴィオレッタ・ミサキ　6

●諸記録　7～9
①入試結果　②学位授与件数　③オープンキャンパス2004開催　④キャンパスミーティング
⑤人事異動　⑥招へい外国人研究者等の記録　⑦奨学寄付金受入　⑧受託研究の受入
⑨国際シンポジウム企画のお知らせ　⑩ラウンドテーブル・アワー湧く

●諸報　9
新任教官、事務官紹介

●同窓会（京友会）便り　教育学講座　教授　辻本 雅史　10

巻頭言

目覚めて暫く

研究科長　学部長　藤原　勝紀

慌ただしい暮らしの中で、世間や季節が移り変わる微妙な感触は、やはり相応に感性が働く落ち着いた時と場が必要であることを痛感するこの頃です。

制度の改革は人為的なことですが、その上に本年は、台風・豪雨・地震などの災害が相つぎました。自然が、季節の移り変わりや風情に鈍感になった人間の感性に注意を喚起させるように、それなら強烈にとその姿を露骨に示してみせたかのごとくです。

こうした自然界の仕業にも似て、国立大学法人京都大学という仕掛けは、今後の大学づくりへの根本的な問いと変革を促します。それは一方で斬新な学問成果と教育研究システムの構築を求め、他方で既存の営みと教育研究体制への評価をつうじて、その存在理由・存在価値を改めて問いかけています。身にどこか窮屈だとの噂を耳に、心と教育を標榜する部局の一員として、自らの教育研究の営みが人間の感性に深く響いて、実際に人と世間が動くような学問的インパクトを備える必要性を痛切に感じます。

そこで改めて教育学部誕生に至る歴史的な経緯について京都大学百年史総説編に繙いてみます。

昭和２１（1946）年4月、米国教育使節団報告を契機に新制大学が方向づけられました。その際、教員養成は大学の任務と位置づけられましたが、国立総合大学には言及がなく、当時の鳥養総長が師範学校の合併でない（教員養成でない）教育学研究を目指す「全国的ノLeaderヲ養成スル」方針を明らかにし、昭和24年の新制京都大学とともに教育学部が誕生しました。この発足事情こそが初心のあり処でしょう。

当初の教育学部は、文学部の教育学教授法講座を母体に出発しました。教官定員など一切が予算化されておらず、昭和25年に全学の学部長や事務局長などで組織された教育学部整備委員会を設置して、建物の新設を含む新しい学部づくりが開始され、文学部、附属図書館、旧地球物理学教室、尊攘堂、法経新館を経て、昭和31（1956）年には熊野学舎、昭和40（1965）年3月に現在地の新学舎に移り学部らしい体裁を整えたということです。

このように現在の教育学研究科・教育学部は、たいそう難産の末に、新制京都大学の全学的支援によって現在の礎となる姿形が創設されたのです。もとより小部局であるだけに、高度に凝縮された質と自覚が、構成員各人の責任と重みとして要請されることは、当初からの必然的な課題であったわけです。

いま本学舎での出発から約40年が経ち、建物も老朽化しました、それ以上に教員組織と学生数の増加による教育研究スペースの狭矮化が深刻な問題です。家族的な学部の特色イメージは、もはや団欒や交流の場も用意できない状況になっています。

このような中も、本年度の同窓会総会では、全国でご活躍中の大先輩によるパネル討論を行い、貴重なご意見とエールを頂戴しました。部局の主な活動では、教育研究の着実な推進のための「専門的教養知の働きとその養成に関する革新的・基礎的研究」が総長裁量経費による支援を受けることが実現しました。国際交流基金との共催『ものづくりの美・ひとづくりの美』（日独国際シンポジウム）も実現します。教職員・学生への人権研修会、ハラスメント防止に関するガイドライン作成、盗難防止及び情報セキュリティへの理解を深めるパンフ「安心してコンピューターを使うために」を作成するなど、学生自治会・院生協議会の協力もえて実地啓発に努めながら、部局総勢で地道に実績をつみ重ねています。

内外各位のご協力に感謝し、つねに総力で取り組む所存です。一層の温かなご支援をお願いします。

教育学講座
教授　鈴木晶子

19世紀後半から専門分化を続けてきた諸学問はいま新たな連携と統合の時代を迎えています。その少し前、18世紀後半のヨーロッパで、国家の大計といわれた教育、とりわけ学校教育の専門家向けに編み出されたのが、明治以降の日本にも導入されたいわゆる近代教育学です。当時の教育学は野生児研究を通して医学や博物学、また心理学の前身であった魂論、哲学などと今より密接な関係にありました。そして現在、教育学はある意味、学問としての危機に陥っています。社会からは山積する教育問題に迅速に対応できていないと批判され、大学改革の波のなかでは教育学者は批判するだけで具体案を出せないといわれます。教育学は今何をすべきなのか?またどんな諸学と再び手を組めるのか?この問いに応えるには、人間の変容解明にずっとこだわってきた教育学ゆえの強みと弱みをまず自覚しなくてはなりません。と同時に、教育に関わってきた人みなの、その教育への個々のまなざしを解明していく必要があります。私のやっている教育哲学、思想研究は、教育に向き合う現代の私たちに巣食う思考の型を、語り分析を通して明るみだすことです。そして6年前に、教育を語る言葉の裏を読み、語り手の心の襞に分け入る技を解明するという一連の作業を、「教育詩学（ポイエティーク）」として立ち上げました。教育学や教育的まなざしの型を相対化するこの試みは、理系・文系未分離あるいは理論・実践未分離といった教育学の特質をその原点から照射します。その昔、同じ関心を共有しながらも専門分化の過程で縁を切ってしまった脳研究や、フィールド研究、さらには新しく生まれた人工頭脳研究などと手を結ぶ契機を生むかもしれません。教育学という学問の内部からの崩壊と再生がどのように進んでいくのか、崩壊の瓦礫の中から立ち上がる力はどこからやってくるのか、スリリングですが楽しくもある今日このごろです。

研究ノート

比較教育政策学講座
博士後期課程3年
日本学術振興会特別研究員
楠山　研

比較教育学は固有の方法をもたない。このことはこの学問の弱点にもなるが、研究対象・目的に合わせた方法を自ら選択できる点は大きな魅力であると考えている。まず１つの国を選び、そこに深入りしていくことから「比較」が始まる。

私は現在、中国の教育制度を研究対象としている。とくに学校段階の接続には、進学、試験、普職分流、就職など、子どもの将来を左右する大きなイベントが凝縮されている。そこでは国、地方政府、学校、子どもや親の意向が複雑にからみあい、各地で様々な現象がおこっている。これを手がかりに中国社会を見通すことが当面の目標であるが、莫大な人口と独特の文化を持つ中国は、知れば知るほど「近くて遠い国」となっていく。

中国の小学校の就学率は99%を超えている。しかし小学生だけで１億2000万人に達する中国でのこの数字は、今なお小学校に入学さえしない、あるいは退学してしまう児童が数百万人単位で存在することも示している。私は2004年７月まで１年間北京に滞在し、その間に雲南省などで、山中にある小さな学校をいくつか参観する機会を得た。小学生は教室で寝泊まりし、食事は１日２回。朝２時間の授業を受けてやっと食べる朝食はご飯と漬け物２切れであった。それでも窓から教室を覗くだけの子どもよりは恵まれているのだという。「子どもを働かせず、学校に通わせよう」というスローガンは、高層ビルの建ち並ぶ北京の街角では気にもとまらないが、現地ではとても重みがあった。その小学生が見せてくれたノートの端には、ちびまる子ちゃんがいた。貧困にあえぐ村でも、テレビアンテナがあり、都会の生活を知っている。「勉強して行きたい所は？」という質問に、先刻私が出てきた町をあげた子どもは、テレビの中の世界をどうみているのだろう。

こうした経験は私の当面の研究に直結するものではないが、論文には実感のこもった１行が加えられると思う。広大で多様な中国に対して、書籍等からの知識にこうした経験を丁寧に重ね合わせていくことで、私なりの方法を見つけたい。

教育認知心理学講座
博士後期課程2年
日本学術振興会特別研究員
安藤花恵

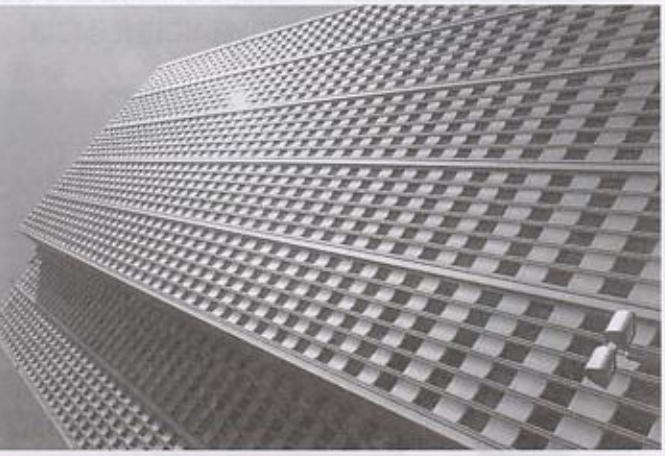
私は、「演技のうまい俳優とへたな俳優は何が違うのか」ということに興味を持ち、演劇俳優の熟達化というテーマで研究をおこなっています。熟達化研究は、初心者と熟達者を比較して、熟達者がどのような知識やスキルを身につけているかを調べるもので、チェスや囲碁、物理学などの学術や、スポーツ、ピアノ演奏など、さまざまな領域での熟達化が調べられてきています。自分では到底到達できないようなレベルに達した熟達者たちが、どのようなことを知っていて、何を考えているのかなどを知ることができる、とても興味深い研究分野です。

そのようにさまざまな領域での熟達化が調べられてきている中で、なぜ演劇なのか、と時々尋ねられます。理由は簡単で、私自身が学部生時代に演劇をやっていて、「演技の上手な人は、なぜ上手なんだろう」「どうしたら演技がうまくなるんだろう」と、疑問に思っていたからです。

学部卒業論文からこのテーマに取り組み、さまざまな長さの経験をもつ俳優を集めて、質問紙に答えてもらったり、演技計画を立ててもらったり、実際に演技をしてもらったりと、さまざまな方法を用いて実験・調査をおこなってきています。その中で、経験の長い俳優は、時間をかけて演技計画を立て、立てた演技計画が多様であること、表現したいことが実際に相手に伝わるような演技ができることなどがわかってきました。また、経験の長い俳優は、演技計画を立てる時にも演技をする時にも、それを見る観客の視点に立っていることなどもわかってきています。

演技のうまい俳優とへたな俳優の演技がどのように違うかだけでなく、演技のうまい人が何を知っていて、どのような考え方をしているからその違いがうまれるのか、演技のうまい俳優になるためにはどのようにすればいいのかなど、知りたいことはまだまだあります。これからも、演技のうまい俳優の持つ秘密を探るため、研究を続けていきたいと思っています。

社会人院生から



教育科学専攻　専修コース
修士課程1年
津田昌宏

私は、職を捨て家族を千葉に残して今春専修コースに入学しました。その思いを支えているのは次のような考え方です。即ち、日本人は（特にビジネスマンは）平均的に事務能力や取りまとめの能力は高いが、概念構成や思考の深さ（以下高次の思考力と総称してみます）で欧米人に引けをとるのではないか、これでは知のグローバルな競争時代に生き残れないのではないか、というややオーバーにいえばじっとしておれない気持であります。

ご承知でしょうか。ムーディーズのような世界的な格付け機関が日本の信用力を、アメリカやイギリスが最上級であるのに比べて、6段階目でアフリカのボツワナと同格に評価しているのです。格付けは経済の問題ではありますが、実は国の「生きる力」を総合的に評価していると言って良いでしょう。日本は世界でも2番目の経済大国ですが、実は厳しい世界の目が日本の将来を不安視していると私は感じています。

そんなことは経営学の考えることだと批判されそうですが、私はすべての知の根源は教育にあり、高次の思考力をつけるような教育を構築しなければならないと考えています。いまだ学ならずですが、日本人がこのようになったのはどうやら戦後の教育全体に問題があるのではないかと思っています。学力論争は何度も行われていますが、高次の思考力が議論になったことはあまりないようです。政治家も行政も関心を払ったように思われないし、いや逆に高度の思考力を抑えようとしたのではないかと疑ってもいます。

グローバルな知の競争社会は、どのような社会でどのような知が求められるのか、日本人の英知を結集してこの問題に取り組む必要があるように思います。私は実務家としてこの問題に取り組み、将来は教育改革の提言をしていくようなNPOで自分の考えを世に問うていきたいと考えています。

事務室より
・clerical room・

専門職員
藤岡正雄

◆法人化以降の就職戦線

期待と不安を抱きながら法人化がスタートして、半年が過ぎた。

経済不況の影響か、就職戦線において、京大ブランドが通用しなくなってきていると耳にすることもかなり増えてきた。先日、某私立大学の就職部を見学する機会があったが、そのスケールの大きさに驚いた。本学のキャリアサポートセンターの充実も、急務であることを痛感した。

就職後の研修を当てにしない、まどろっこしいやり方でなく、現場ではヘッドハンティングではない修了後、即戦力の需要が生じている。実際、法科大学院のような専門職大学院や卒業生の大多数が進学・修了するケースもある。教育職員においても中高一貫教育に対応した中学校教諭免許状、高等学校教諭免許状の必要性、理数科に限定されない専修免許状の必要性、更には専門職大学院や教員免許更新制について、中央教育審議会への諮問と同様の状況になりつつある。

あの阪神震災の爪痕が残る淡路島で、恒例の全学教育シンポジウムが開催された。。中でも、教育の外部評価について、活発な議論が展開された。本学の学風とは関係なく点検項目が多数設定され、その評価結果によって資源分配が決定されるということであった。何れにせよ、客観的な評価されうる実績を積み上げることによって、より高い点数を獲得することが出来るのであろうか。現実的には、国家試験合格率の向上、一部上場会社への就職者数の増加、離籍・除籍者の減少、中退者の減少、長期休学者の減少、最短修業年限卒業・修了者率の向上、卒業・修了後の無業者の減少、世界的に著名な賞の受賞者の輩出などなどが考えられるのだが。

個人的なことで誠に恐縮ですが、7月には、法人化後、初めての総長名の人事異動通知書を頂いたが、やはり介護等体験（平成10年度入学者から適用、中学校教諭免許状には必須）が今回も欠落しており、遺憾ながら失望を禁じ得ない。何故なら、我々の仕事は常に先生方と一致協力して行われ、事務方の一人歩きは到底考えられないからである。

図書室より
・library・

図書掛
福井京子

◆閲覧システム運用開始!

「教育学部は、ずっと手書きだと思っていました。えっ、借用書を書かなくていいのですか?」
「これは、すごい!感激ですね!」
「教育学部も、とうとう やりましたね!」
利用者の驚きの声です。

2004年10月から閲覧システムが稼働いたしました。永年の懸案であった貸出の機械化が実現したのですから、驚くのも当たり前かもしれません。閲覧システム導入について、解決すべき課題が多々あることは、既にお知らせしたと思います（ニュースレター8号参照）。このすばらしい快挙は、整理担当者のたゆまない努力により実現したのです。これで文系4学部はすべて、閲覧システムが導入されたことになります。今まではOPACの画面上で貸出中かどうかを見ることができなかったのですが、これで無駄足を踏んでいただかずに済みます。利用者には、とても便利になったと思います。

しかし、私は少し寂しい気持になっています。今までオリエンテーションの時に住所登録をしてもらっていました。住所登録カードの山の部分に名前と読みを張り、アルファベット順に並べ、それぞれの借用書をファイルしていました。この繰り返しにより、顔、名前、学年、専攻、借用書の字までも覚えることが出来たのです。そうするとリクエスト本が返却された時、来室時にすぐお知らせする事が出来たり、口答で返却のお願いをしたりできました。借用書を書くことにより、簡単な図書館学の知識をお伝えするなど、いろいろとコミュニケーションが生まれました。よく利用される他学部の利用者の名前も覚えています。これにより返却率も上がるなど、閲覧業務がスムースにいっていました。

でも、これからはすべて画面操作になるので、手続きをする時、画面を見るのに必死で、利用者のお顔も見ないことがあります。教育学部は1学年、約70人と覚えるのにちょうどいい人数なのですが、これから学年を上がってこられる利用者の皆様の名前を覚えられるかどうか、心配でなりません。

もの言わぬ画面の導入が、心の通い路をせきとめぬのか、また新たな課題が生まれました。

臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座　助教授　　角野善宏

臨床教育実践研究センターの助教授として赴任以来、丸一年がたちました。今まで１８年間のほとんどを精神病院と総合病院・神経科で臨床実践してきた経験から、いま私が所属しながらも外から見た臨床教育実践研究センターについて書きたいと思います。まずその名称からして、臨床教育を実践し研究する立場にあります。その機能は多様であり、具体的には①心理臨床の実践の場であること。②大学院生を中心とした心理臨床の研修・訓練の場であること。③心理臨床の働きを研究する場であること。④教師と臨床心理士をつなぎ、それぞれが現場でうまく機能できるように再教育を行う場であること。⑤リカレントなどの教育講座や公開講演を持ち、より広く臨床教育と実践を学んでいく場であることなどです。正直言って、あまりにも求められている仕事が多いのと多種多様な内容を含んでいるというのが感想です。そういった中で、私が特に注意を払い重要視しているのが、①と②の機能です。規模こそ小さいかもしれませんが、これは心の臨床におけるいわば大学病院と同じ機能を持っています。また非常に驚いたことですが、実際院生が受け持っているケースでも、難しいものが多いということです。それだけ厳しい訓練を受ける機会に恵まれているとも言えるし、同時に心理臨床に伴う危険が絶えず待ち受けているとも言えるのです。そのような危険が存在しながらも臨床家や研究者が育っているのは、このセンターに目には見えないが強い心理的守りの構造が備わっているからだと思います。その心理的構造は、このセンターに携わってきている人たちや教育学研究科の持つ伝統的な力が生み出したものでしょう。このような困難で危険の伴う仕事が日々行われている臨床実践現場としてのセンターが、さらに充実した機能を発揮するために、私たちにとって日々の努力と絶えず鋭い観点を持ち臨床の教育と実践と研究に励む場であることに疑いはありません。実際目立つ仕事でもなく危険も伴いますが、個人に対しても社会に対しても本当に大切な仕事の場がセンターにはあります。それに見合う自覚と自負を、大切にしたいと思います。

留学生から

教育科学専攻　教育史
修士課程２年
タカノ・ヴィオレッタ・ミサキ

■胡椒畑からの旅

私はブラジルのアマゾンの奥地で胡椒畑に囲まれて育ちました。胡椒を収穫して脱穀すると、ビニールシートの上で天日乾燥させます。胡椒の野性的な、つんとした香りが常にただよっていましたが、くしゃみをしたことはなかったですね（笑）。そのような環境にいた自分が今、京都大学で学んでいることを考えると、信じられない気持ちになります。

親は日本から新天地を求めてブラジルに移住し、ブラジル生まれである自分が今度は反対に夢を抱いて日本で暮らしているということには、運命を感じます。

日系ブラジル人である私は、「あなたはブラジル人？日本人？」という質問をどこにいても常に受けます。反対に、勝手に「あなたは日本人ですよ。」「やっぱりブラジル人だね。」と決めつけられると、私は複雑な気持ちになります。「両方」と答えることもできるのですが、「私はエイリアンです。」と答えることにしていました。そして証拠として携帯しているエイリアン・カードを提示していました。（外国人登録証明書は英語で“Certificate of Alien Registration”となっている）

京大での研究テーマは「ブラジル日系移民の教育史」です。世界的にナショナリズムが高揚した1930年代におけるブラジル日系移民の教育を、二世の声に耳をかたむけながら語っていこうと思っています。そこには、両国の狭間で命をかけて自分のアイデンティティと役割について悩み、考える人々がいました。時代や背景は異なりますが、自分と同じ二世という立場の人に多く出会えたことは心強く、私には励みになりました。

研究室では、いつでも暖かく指導してくださる先生、様々な国から多様な背景を持った仲間と出会うことができました。それぞれの視点から様々な話が飛び交うとてもすばらしい環境で学べることを、本当に嬉しく思っています。

諸記録

◆平成17年度入試結果

・教育学部

日程等	募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	40				
後期日程	20				
第3年次編入学	10	35	35	10	

・教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	18				
		臨床教育学専攻	14				
	教育科学専攻(専修コース)		10	41(1)	41(1)	10	
	臨床教育学専攻(第2種)		若干名				
博士後期課程臨床教育学専攻(臨床実践指導者養成コース)			4	13	13	4	
博士後期課程編入学			若干名				

(　)内の数は外国人留学生で内数

◆平成16年度学位授与件数 (H16.10.1現在)

学位名等		授与者数
学士	教育科学科	
	教育社会学科	
修士	教育科学専攻	
	臨床教育学専攻	
博士	課程博士	3
	論文博士	1

◆キャンパスミーティング

本学では、総長と学生が直接懇談することで相互理解を深めるとともに、学生が総長へ直接意見を伝える機会としてキャンパスミーティングが行われており、このたび、その第2回目が平成16年10月27日(水)に教育学研究科で開催され、東山副学長、藤原教育学研究科長が同席し、同研究科・学部の学生・院生10名と懇談された。

懇談では、教育研究施設の環境の充実、附属図書館の研究個室の利用サービス、部局図書室の開室時間、課外活動や日常生活などについて活発に意見交換が行われた。

◆オープンキャンパス2004開催

(模擬授業のようす)

平成16年8月17日(火)～18日(水)の間、「受験生のための京都大学オープンキャンパス2004」が開催された。

本学部においては、8月17日(火)12:30から実施し、約180名の参加者があった。当日は、藤原学部長の歓迎の挨拶、辻本教授の模擬授業、授業担当教員との意見交換、各系の説明と質疑応答が行われ会場は参加者の熱気にあふれていた。

また、終日、教育学部において学部相談コーナーを設け、学生相談員、教員、教務掛担当者が相談にあたり、参加者からは多数の相談があった。

※当日配布資料に遺漏がありましたので波線部分を追加致します。

→「箱庭療法」「風景構成法」の例(模擬的に作られたものである)。

◆人事異動（H16.4.02～H16.10.01）

・平成16年9月30日付け

[redacted]

・平成16年10月1日付け

[redacted]

・平成15年10月16日付け

鈴木晶子　教授 (教育学講座 助教授より昇任)
岩井八郎　教授 (教育社会学講座 助教授より昇任)

◆招へい外国人研究者等の記録

外国人研究員（京都大学客員教授）

○氏　　名　Widmer Peter (ｳﾞｨﾄﾏｰ　ﾍﾟｰﾀｰ)
現　　職　ラカン派精神分析家（開業）
受入講座　附属臨床教育実践研究センター　臨床心理実践学
受入期間　16．10．1～17．3．29

招へい外国人学者

○氏　　名　Paul Standish (ﾎﾟｰﾙ　ｽﾀﾝﾃﾞｨｯｼｭ)
現　　職　シェフィールド大学教育学部　教授
活動内容　エマソン、ソロー、ペルの教育哲学等に関する共同研究
受入講座　臨床教育学講座
受入教員　齋藤直子　助教授
受入期間　16．5．16～16．6．13

○氏　　名　Laura Elizabeth Crawford (ﾛｰﾗ　ｴﾘｻﾞﾍﾞｽ　ｸﾛﾌｫｰﾄﾞ)
現　　職　リッチモンド大学心理学部　助教授
活動内容　空間認知と言語に関する共同研究
受入講座　教育認知心理学講座
受入教員　楠見　孝　助教授
受入期間　16．6．29～16．9．27

○氏　　名　呉　成　哲(ｵ ｿﾝ ﾁｮﾙ)
現　　職　清州教育大学　助教授
活動内容　日本植民地支配下韓国と台湾の初等教育に関する比較研究
受入講座　教育学講座
受入教員　駒込　武　助教授
受入期間　16．9．1～17．8．31

外国人共同研究者

○氏　　名　鄭　駿　永(ｿﾞﾝｽﾞﾝﾖﾝ)
現　　職　ソウル大学大学院社会学科博士課程研究生
活動内容　日本植民地支配下韓国と台湾の初等教育に関する比較研究
受入講座　教育学講座
受入教員　駒込　武　助教授
受入期間　16．9．1～17．8．31

来　　訪

○機関名等　タイ　Srinakharinwirot大学(教育、社会科学、社会研究調査団) (17名)
来 訪 日　16．5．24

○機関名等　メキシコ　las Americas 大学(1名)
来 訪 日　16．8．3

○機関名等　中国　中央教育科学研究所(2名)
来 訪 日　16．9．1

◆奨学寄附金受入

寄附金の名称	寄　附　目　的	寄　附　者	研究担当者
斉藤智助教授に対する旅費助成金	2004年にイギリスで行われる「ワーキングメモリーに関する共同研究」ワークショップ参加の為の旅行費	大和日英基金	斉藤　智
「臨床実践指導者養成コース」に対する教育研究助成金	臨床心理士養成に携わる人材育成にかかる博士後期課程「臨床実践指導者養成コース」に対する教育研究助成	財団法人 日本臨床心理士資格認定協会 会頭　木田　宏	藤原勝紀
近代日本における女性の「嗜み」についての比較社会史的研究に関する研究助成金	近代日本における女性の「嗜み」についての比較社会史的研究に対する教育研究助成	財団法人 サントリー文化財団	稲垣恭子

◆受託研究の受入

寄付委託者	研　究　題　目	研究担当者
株式会社 ジェイティービー 西日本営業本部	中・高年層の学びのスタイルに関する総合的研究	前平泰志

国際シンポジウム企画のお知らせ

教育学研究科が総長裁量経費の助成を受けて共同研究している「専門的教養知」に関する研究成果の一部を社会に向けて公開するという目的で、国際シンポジウムを企画しています。ものづくりの美を追求することは、究極的にはひとづくりの美へと繋がるのではないか、その繋がりを可能にするものこそ「専門的教養知」ではないかという問題意識から、来年2005年3月6、7日の二日間、京都新聞社ホールを会場に、国際交流基金および京都新聞社と共催で行う「ものづくりの美・ひとづくりの美　-教育の未来を求めて、国際比較の視点から」というシンポジウムです。ドイツからは美と教育をテーマに研究している4名の研究者を招き、また日本側からは楽焼、能楽など実際に芸術や文化の創造に関わっている方々にもおいでいただき、本研究科のスタッフと議論を深めるという催しです。一般公開ですので、どうぞふるってご参加くださいますようご案内申し上げます。

教育学講座　教授　鈴木晶子

ラウンドテーブル・アワー湧く

11月25日（木）15時より、研究科長室にて研究交流会（ラウンドテーブル・アワー湧く）が催されました。同じ研究科に籍を置きながらも、お互いの研究を知り合う機会の少なかった教員・院生にとっては、対話と新しい出会いの場となりました。今後も将来計画構想委員会ワーキンググループが中心となって企画を推進致します。次回は12月27日（月）15時から研究科長室で予定されています。

諸報

◆新任教官・事務官紹介（「　」内は本人の抱負）

[redacted]

同窓会（京友会）の変革
―教育学研究科の未来に向けて

教育学講座　教授　**辻本雅史**
（教育学部同窓会委員）

国立大学法人化は、絶えざる大学の自己変革の圧力を強めています。大学の変革期にもっとも頼りになる組織、それが同窓会なのです。先に策定した「中期目標・中期計画」にも、京都大学としてまた教育学研究科として、「同窓会との連携」が明記されています。「全学同窓会」の組織化も、理事会や法人事務局で検討中と聞いています。

わが「教育学部同窓会（京友会）」は、旧制の文学部教育学講座の卒業生から学部1回生の現役学生に至る学生と教員（元教官も含む）をもって組織されています。わが同窓会は、これまで総会・懇親会、講演会、名簿発行の他、教育学部・教育学研究科のために、新入学生と卒業生の歓送迎会、及び留学生対象の国際賞授与と大学院生の研究助成等の事業を行って来ています。いま法人化を迎え、同窓会の新たな意味づけ、および教育学部との連携強化や同窓生同士の緊密な連絡体制の構築に向けて、同窓会改革が進められています。

その一環としてHPが開設されました。〈http:///www.dosokai.ne.jp/kyoyukai/〉。また研究科長（学部長）が会長になるという旧態を改め、先の総会（7月11日）で、上杉孝實氏（京大名誉教授）が新会長に就任されました。新会長が教育学部長経験者となったのは、過渡期の現状を考慮してのこと。教育学部内に置かれている事務局の、将来の独立化も、検討されています。

また先の総会では、例年の各界で活躍中の卒業生の講演ではなく、教育学部同窓会の意義を問うパネルディスカッションが行われました。パネラーとして、地域教育界の立場から藤田裕之氏（79年卒、京都市教育委員会）、役員経験者の立場から大西孝雄氏（62年卒、企業勤務）、東京同窓会を代表して田中一昭氏（59年卒、総理府勤務を経て、拓殖大学教授）、現役教員を代表して高見茂氏（80年修士修了、比較教育政策学講座教授）、以上4氏による、率直で且つ建設的な意見が出されました。

同窓会は卒業生だけのための組織ではありません。教育学研究科・教育学部を作り上げてきた歴史の一つ一つが確かに刻み込まれている組織なのです。そう考えれば、教育学研究科の今と将来、そして在学中の学生の今後に、かけがえなのない関わり方ができる、とても大きな可能性に満ちた組織なのです。学生会員も教員会員も、同窓会を身近に感じられる活動をどう展開していくのか、それを共に考えていきたいものです。とりあえず総会に出てみましょう。見知らぬ人とも、親しい共同性がもてるに違いありません。

編集後記

大学は法人化に伴う変革期、世界情勢も緊迫し、国内の災害も多く、何かとあわただしく多忙な日々がつづく。未来は漠と曇って、なかなか見えてこない。しかし、こういうときこそ、時流に流されず、山々の頂から海へそそぐ川のせせらぎに耳を傾け、渡り鳥の群れがはるか彼方へ飛翔していく空の高みを想像しながら、長い時空間で世界を眺めていく眼力を養っていきたいと、そっとつぶやいてみる。

（Y.Y.記）

京都大学教育学研究科
・教育学部広報委員会（平成16年4月～）

委員長　高見　茂　教授（比較教育政策学講座）
委　員　藤原　勝紀　教授（教育学研究科長・学部長）
委　員　やまだ　ようこ　教授（教育方法学講座）
委　員　伊藤　良子　教授（臨床心理実践学講座）
委　員　村田　宗一　事務長
委　員　眞継　芳春　総務掛長
委　員　前田　勝　教務掛長

事務担当
教育学研究科・教育学部総務掛
TEL 075（753）3003

表紙デザイン　山田旬子